我が魂の遍歴と新しい時代の理

酒井伸雄

運命	１
天理教	３
神因縁の道	６
文明法則史学	９
生命の法則	１２
いつも みんな なかよし	１３
天命の導き	１６
歴史の大転換期	１８
人類の課題	２０
東と西	２２
原初の理	２５
相対	２８
絶対	２９
裏の論理	３０
新たなる宗教の時代	３３
自然	３５
究極の愛	３８
愛の伝達	３９
あとがき	４１

http://yogananda.cc
http://yogananda.cc/new/01.pdf
（印刷用 PDF ファイル）

運命

運命とはいったい何なのか。
人はこの世に生まれ落ちた瞬間から、定められた運命という人生ストリーを持っているのでしょうか。
また日々生きていく中での思い、行動というものによって、運命が新たに形作られていくのだとしても、その新たに作り出される運命もまた、生まれる前から作り出されるように定められていたのではないか、そんなどんなに考えても結論の出ない疑問が頭の中を駆け巡ります。

９５年、菅原太史先生という卓越した超能力を持つ神主さんと出会いました。
菅原先生は栃木県にお住まいで、広島に来られる際に、当時とても懇意にしていただいていた植物の超能力研究家　故三上晃先生の元を訪ねられるということで、私がご案内させていただきました。

白いあごひげをたくわえられた菅原先生は寡黙でひょうひょうとした方でしたが、時折相手の問題的をズバリと指摘される鋭い目を持ち、私にもよくいろんなアドバイスをしてくださいました。

後でも触れますが、私はとにかくこういった超人的な方ととても縁が深く、一度ご縁をいただくと、ごく短期間の内に深い交流ができてしまいます。
菅原先生もなぜか私のことをとてもよく可愛がってくださり、中国地方や九州に来られるたびに我が家に立ち寄られ、夜遅くまで一緒に酒を酌み交わしました。

菅原先生の経歴はとても変っています。
五十代まではごく普通のサラリーマンとして働き、あることをキッカケに神主となり、お会いした当時、どこの神社にも属さず、その能力を以て全国の企業や家庭を祈願して回っておられました。
けれども残念ながら数年前に他界され、もう再びお会いすることはできません。

菅原先生がサラリーマン時代、偶然出会ったある霊能力を持つご婦人から、
「あなたは神様の道を歩む運命にある」
と指摘されたそうです。

そしてそれからほんのしばらくして、知り合いから誘われてある神主さんのお話を聴きに行き、そのお話がおわった後に個人的に面談する機会を持ったところ、その神主さん、目がお悪い方だったそうですが、額のところにハッキリと第三の目が映り、その目で菅原先生を見つめられ、一言、
「明日から私のところに来て運転手になりなさい」
と言われ、神主への道を歩まれるようになったのです。

菅原先生は小さい頃東北にお住まいで、三歳の時、ある田舎の温泉旅館に泊まり、裸のまま雪の積もる露天風呂ではしゃぎ回り、肺炎になってしまいました。
雪に閉ざされた温泉旅館で医者を呼びに行くこともできません。
困り果てたお母様が、その旅館に同宿していた神主さんに、
「この子を神様に捧げますので、どうか命だけは助けてください」
とお願いし、祈願してもらわれたそうです。

そのことを小さい頃から聞かされていた菅原先生は、五十年後、表に現れてきた神様との因縁を素直に受け入れられました。

私もこの菅原先生のお話しを深い共感を以て受け取ることができます。
それは私にも菅原先生と同じ「神因縁」というものがあるからです。

天理教

中学校二年になった時、父の転勤で奈良に引っ越しました。
新しい住まいとなったマンションの同じフロアーに小さな男の子のいる家庭があり、そこの家と家族ぐるみでとても親しくなりました。

翌年その家に可愛らしい男の子、三年後には女の子が誕生し、大の子ども好きの私はそれこそ全身で子どもたちに愛情を注ぎました。
後に公文という子どもの教育の会社に入ったのも、この時の楽しい体験が大きく影響していることは間違いありません。

幸せとは長続きしないものなのでしょうか。
残念ながらそのご夫婦はいろんな葛藤の末離婚をし、ご実家が天理教だった奥さんは心の修養、人生立て直しの道として天理教布教師への道を歩まれました。

布教の方法は天理教で言う単独布教というもので、着の身着のままどこかの町で布教の日々を過ごし、そこで縁を持った信者さんからのお与えだけで生活をするという過酷なものです。

布教の場所は京都市伏見区でした。
布教を始めた当初は、一番下の女の子だけを手元に置いて、おんぶ紐で背中に抱え布教に歩いておられました。
私もちょうど大学に入った頃で、子どもに会うのが楽しみで布教所に通うようになり、そのすさまじい生き様を間近で見、心動かされ、天理教に入信するようになりました。

子どものお母さん、福本純子さんが、私を神の道に導いてくださった天理教の先生です。
今現在、私は天理教という宗教からは離れてしまいましたが、先生からは定期的に連絡をいただき、何年に一度かは現在教会を構えておられる天理市に足を運ばせてもらっています。

先生の生き様は、まさに尊敬に値する理に徹しきったすさまじいものです。
天理教から離れてしまった今も、私は自分の精神世界の原点がこの天理教であり、この先生であることをとても誇りに思っています。

元々ボランティア精神が旺盛な私は、大学生になったら何かボランティア活動をしたいと漠然と考えていました。
天理教の教理の基本は「因果応報」、人にした行為がすべて自分に返る、幸せになるためには人を幸せにする、というシンプルなものです。
ですから布教師の役目というのは、天理教の布教とともに、信者さんの幸せを願った徹底した奉仕、ボランティアです。
その究極の姿を間近で見せてもらったのですから、心動かない訳がありません。

また因果応報というものが本当に宇宙の立法かどうかは分からなかったのですが、是非そうあってもらいたい、「正直者が馬鹿を見る世の中」であって欲しくないと、当時強烈に心で願いました。

当時の布教所に集まってくる人たちは、まさに心の重症患者さんばかり、誠にもってすごい世界でした。
住み込んでいたのが背中一面に入れ墨を背負い、左半身不随の元やくざのおじいさん。
けんかが三度の飯よりも大好きというおじさん、その奥さんは寝たきりの病人です。
いつもはニコニコ愛想がいいものの、一度機嫌を壊すと包丁を振り回す色情狂で小児麻痺のおじさん。

そんな人たちに囲まれて、日々いろんなドラマが生まれました。
私は自分が当事者でなかったからだと思いますが、そんなことがなぜかとても楽しく思え、布教所に行くのが何よりの楽しみになりました。

いわゆる社会的弱者と呼ばれるような方たちと一緒に生活をするのが好きなのでしょう。
天理教というものとは別に、こういった人たちとともに生活できる施設を将来運営できればと願い、特に子どもが大好きということもあり、いつか孤児院の運営をと夢見るようになりました。

その十年後、初めての海外旅行でインドに行き、インドは自分の魂の故郷であるかのような感覚を覚えました。
一昨年インド人ファミリーと偶然日本で出会いのご縁をもらい、深い心の絆を結び、そのファミリーが孤児院経営者なのですから、運命、あるいは想念というものは、強烈な力を持っているのだと思わざる得ません。

京都の布教所には毎週末泊まり込みで通い、心は一直線に天理教に傾いていきました。
けれども今考えてみると、私が心惹かれたのは天理教という宗教、教理ではなく、その人の幸せを第一義として考え生活をする布教師としての先生の姿だったのだと思います。

天理教と出合って三年目、父親が胃ガンになりました。
本人には最後まで知らせませんでしたが、医師の話によると、末期であり、余命数ヶ月ということでした。

先生は私の父とも当然面識があり、父の快癒を命がけで祈ってくださいました。
私も初めて肉親の生命の危機を迎え、必死になって助かる道はないかを模索しました。

そこで出た結論、それは私が神の道、天理教の布教師になるという志を立てることで、父の命を救ってもらおうというものでした。
これは無理矢理立てた志ではありません。
逆に好機だと感じたほど、当時の私は天理教の世界に深く心が入り込んでいました。

当時住んでいた奈良県生駒市の自宅から、上の系統である大和郡山市にある郡山大教会を通り、天理市の天理教教会本部に三日間、自転車をこぎ片道二時間以上かけて通い、神前で誓いを立てました。

その時の誓いが聞き入れられたのかどうか、父はその時の危機は手術で何とか脱することができ、その四年後、再発したガンによって黄泉の国へと旅立っていきました。

天理教の奉仕活動は、ひのきしんと呼ばれます。

神因縁の道

神の道、天理教の布教師になることを志した私ではありますが、その時周りからの説得もあり、大学を卒業し、就職をし、結果的に少しずつ天理教というものから離れることになりました。

神前で必死の思いで誓いを立てた天理教布教師への道、これを守っていないことに関して、不思議なほど罪悪感がありません。
もっと正直に言うならば、実のところまったく罪の意識がないのです。

それは形としては天理教布教師になるという誓いだったのですが、その奥の本質部分は神の道であり、真理を追い求め、自分にできる限りの社会奉仕をするという道だったからです。

就職をして初めて親元を離れて一人暮らしを始めました。
初めて体験する社会人としての生活は、世間知らずだった私にとって驚きと学びの連続でした。
そこで広い世間というものを知り、自分には特定の固有名詞を持った神名を唱える宗教（組織）というものが肌に合わないということを知るようになりました。

この世界には数え切れないほどの宗教があり、それぞれ異なった神名を唱え、それぞれの宗教で「これが真理だ」と教えられる教義も千差万別です。
そんな中、信仰を持つ多くの人が、たまたま縁あって出合った自分の信じる宗教が、絶対のものだと信じておられるその姿が、私にはどうしても体で理解できないのです。

世界の各地で、異なった宗教を持つ者同士が憎しみ合い、時には殺し合いを行なっています。
宗教の説く愛、平和、これは各宗教間に存在する教理の違いという壁を壊さない限り絶対に実現しないのではないでしょうか。

私は天理教、そして宗教というものから心が離れてしまいましたが、神の道を誓ったあの時の気持ちは一時たりとも忘れたことはありません。
今も潜在意識のレベルでは、２４時間休むことなく真理とは何か、生きるとは、愛とは、平和とは、・・・そんなことを思い続けています。

宗教から離れても宇宙（時空）の絶対的法則、存在としての神の道を歩むことはできる、真理を追究することはできる、そんなことを思い、求め続けてきました。
そして今は、宗教というものから離れたからこそ、真理というものを真っ正面から見つめることができるのだと、自信を持って語ることができるようになりました。

神の道への誓いは私の胸から離れることはありません。
その表れとして、私には深い神因縁というものが与えられました。

社会人として独り立ちをし、天理教から遠ざかってからの私の人との出会いは、まさに神因縁に彩られた奇跡の連続でした。
人に語っても容易に信じてはいただけないものだとは思いますが、宗教家、超能力者、スピリチュアルな専門家、そんな深い精神世界を持ったものすごい方たちと次々と出会いました。
そしてその人たちとごく短期間の内に懇意になり、最も身近なところにいたり、そのグループで中心的な活動をしたりという極めて濃密な関係を結んできました。

これまでそういった人たちから「是非後継者に」、「私の仕事を手伝ってほしい」、「秘伝を教えるから学んで欲しい」などということを言われ続けてきました。
そして私自身も何らかのスピリチュアルな専門家になりたいと願ったのですが、それは叶わない夢でした。
そしてそういった超人的な方たちの姿を間近で見させてもらい、その中に完全に同化しないことによって、結果としてそういった世界を客観的に見ることができました。
これが私の役割であり、望んでいたことなのだと、今はハッキリと理解することができます。

このたび、このレポートを書くにあたり、これまで出会いのご縁をいただいたスピリチュアルな方たちのことを頭の中で整理してみました。

仏教、キリスト教、神道、気功、風水、瞑想、神智学、宇宙エネルギー、潜在能力開発･･･、
そして今最も力を入れて取り組んでいるトイレ掃除やハガキ道といった心の修養を目的としたものまで、これまで深い関わりを持ってきたスピリチュアルな方たちの分野は実にバランスが取れ、かつ多方面であることにあらためて気が付きました。

学生時代、神の道を志した時、あのまま天理教の布教師になっていたら、こんなたくさんのスピリチュアルな方達との出会いは決して得ることはできなかったでしょう。

今スピリチュアルな世界を志す人たち、また一部宗教家の人たちの間では、“神”という言葉の代わりに、同じく絶対的な存在を示す概念として“サムシンググレード”という言葉が流行のように使われています。
この言葉を提唱されたのは、「生命の暗号」等の著書で有名な筑波大学名誉教授の村上和雄先生です。

私はこの村上先生のお話を、今から27年前、村上先生のご実家である天理教の教会でお聴きしました。
村上先生のご実家は天理市内にある立派な天理教の教会で、私は縁あってそこの教会によく通わせてもらい、27年前の夏、その教会に泊まり込んで信者の子どもさんたちのお世話をさせてもらい、その時に子どもたちと一緒に村上先生のお話を聴く機会を持ったのです。

村上先生は教会のご長男で、当時はすぐ下の弟忠雄さんが教会に入り、会長職に就かれていました。

この会長先生が学識、社会人としての経験、人間的風格を備えた魅力的な方で、よく教会を訪ねては会長先生から様々なアドバイスをいただきました。
その頃の私にとって、会長先生はあこがれの存在のような方でした。

私が大学を中退してすぐにでも天理教の布教師になりたいと決意をした時、会長先生は私にハッキリと諭すように反対してくださいました。
もしあの時に会長先生の反対がなければ、たぶん大学をやめて布教師になり、今とはまったく別の人生を歩んでいたはずです。

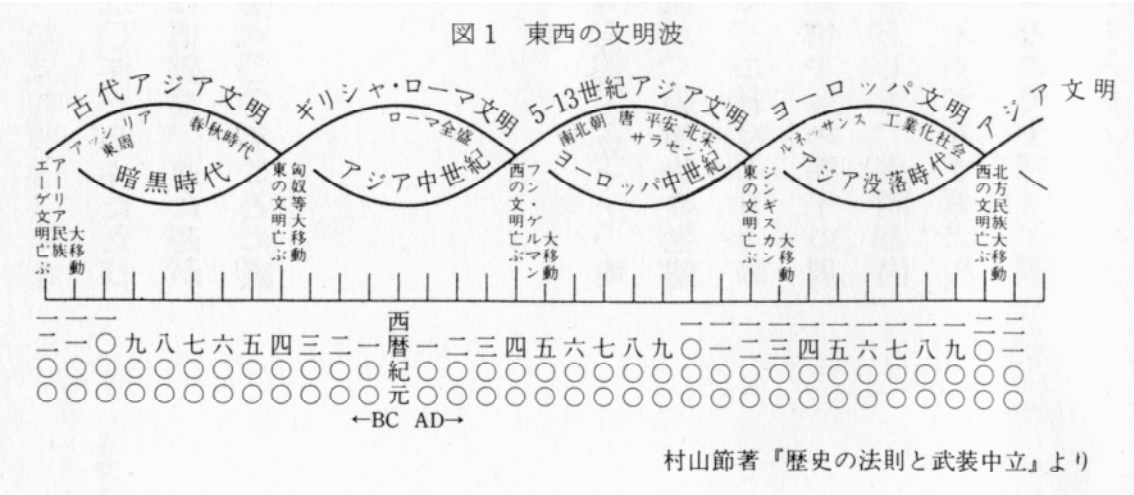
スピリチュアルな世界をグローバルに統括するような概念を提唱する村上和雄先生、その弟さんにスピリチュアルな広い世界へ歩むキッカケを与えていただいたということは、私にとって奇しき因縁と思えてなりません。

文明法則史学

もう三十年にもなる我がスピリチュアルな歩みですが、その中でちょうど二十年前の平成元年を境として、そこからものの見方が根本的に大きく変化していきました。
平成元年、この年に私は「万物に宿る命」というものを知ったのです。

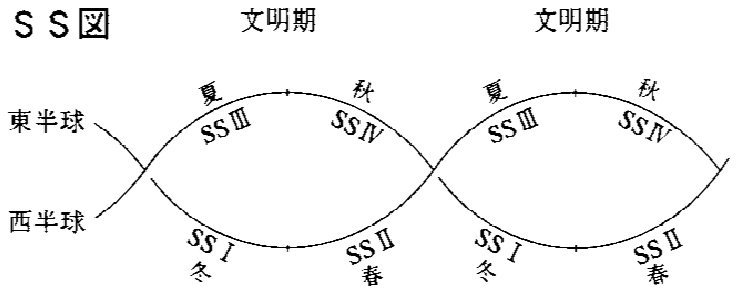
平成元年から二年にかけて、ちょうど一年間岡山に住んでいました。
その時に広島で素晴らしい講演会があるという話を聞き、広島まで新幹線に乗って出かけました。
そこで出合ったのが文明法則史学、歴史の生命学です。

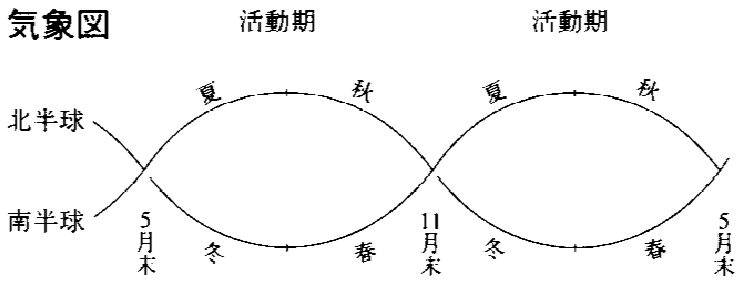
文明法則史学とは、故村山節（みさお）先生が発見し、提唱された歴史の流れをひとつの生命現象としてみた新しい歴史学、概念です。
歴史とは偶発的に起こる事象の集合体ではなく、ひとつの大きな流れがある。
その流れとは、世界を東と西、ふたつの文明に分け、その文明がちょうど８００年ごとに興亡を繰り返す生命リズムを持っている。
その東西文明二本の文明波が描く生命リズムは、まさに人間の命の情報を司る遺伝子ＤＮＡと同じ形である。



歴史に命がある。
しかもその命は二重らせん構造という形を持っている。

このことを初めて知り、私はまさに頭をハンマーで叩きのめされたような強い衝撃を受けました。
これまでは植物や動物にしか宿っていないと思われた生命が、歴史という巨大な流れの中にも存在する。
その生命とは、二重らせん構造が意味するような、何か一定の未知なる法則性に司られている。
これは私にとって二十代最後の年に経験した、まさに「コペルニクス的発想の大転換」でした。





村山節著『文明の神秘と法則』
博進堂文庫 より

ＳＳとは、ソーシャル･システム（Social System）、社会秩序と呼ばれるもので、１６００年サイクルの大きな文明波（ＣＣ＝ Civilization Cycle）です。
そしてこの上に、冬（幼年期）･春（少年期）･夏（青年期）･秋型（壮老年期）、それぞれの季節や人間の成長と同じ特徴を備えた社会システムが構築されます。

歴史にも四季のような移ろいがあり、人間と同じような成長、老化のサイクルがある。
これはまさに歴史上に現れた自然、生命の持つ驚異です。

＜ 生命と文明の法則 ･･･ 二重らせん構造 ＞

	軸	周期	構成要素
ＤＮＡ	空間	超ミクロ	４塩基
文明	東西	１６００年	４ＳＳ
気象	南北	１年	春夏秋冬

当時は文明法則史学の提唱者である村山節先生はまだご存命でしたが、ご高齢で体の自由がきかず、松下政経塾の一期生である林英臣先生が全国を回り、村山先生の名代として文明法則史学を説いておられました。
真理を追究したい、そしてそれを人様に伝えたい、これを自らの神の道と心得ている私が、このことを知って黙っている訳にはいきません。
当時私はまだ普通のサラリーマンだったのですが、その年の８月に自ら企画し、地元岡山で林先生に来ていただき文明法則史学の講演会を行ないました。

懸命にＰＲし、約４０名の方が話を聴いてくださいました。
そしてそれ以降毎月第三土曜日を勉強会ということにして、林先生に浜松から新幹線で来ていただいたのですが、当時は林先生も文明法則史学はまったく知名度が無く、毎回参加者は片手で数えられる程度で、お金のやり繰りにも本当に苦労しました。
林先生にもご迷惑をかけ、当時はゴミ箱のように散らかっていた我が家に泊まっていただいたりするような状態でした。

そんな苦労をしてでも、文明法則史学という学問は、多くの人に伝えるべき意味と重要性を持つものだと当時から深く確信していました。
事実二十年経った今、振り返ってみて文明法則史学から学んだものはそれこそ計り知ることができません。

生命というすべての根本法則を学んだからこそ、身近に出合ったスピリチュアルな個々の事象をひとつの体系として、自分なりにまとめ上げることができました。
文明法則史学と出合っていなければ、どんなに多くの知識を得、体験を積み重ねたとしても、単なる情報通の域を出ることはなかったでしょう。

文明法則史学から歴史の流れを見ると、今は西の文明から東の文明へと覇権を移行する、８００年に一度の文明の大転換期です。
この文明の大転換期には、過去の同時期を見ると明らかなように、それまでの禊ぎ（みそぎ）をするが如く、文明の崩壊、地域紛争、民族の大移動といった現象が起こってきます。

これからは西の文明が崩壊し、東の文明、私たちの住む日本、アジア、インドといった国が文明の中心となってきます。

文明の中心が移行するとともに、人類を支配する価値観そのものも、西のアメリカ、ヨーロッパ的な近代合理主義、科学といったミクロ的なものから、東のすべてのものに命を見いだすマクロ的生命観へと少しずつ移ろっていくのです。

動植物といったものだけではなく歴史という巨大な流れにも命がある。
だとしたら、私たちの身の周りすべてのものにも命が宿っているのではないか。

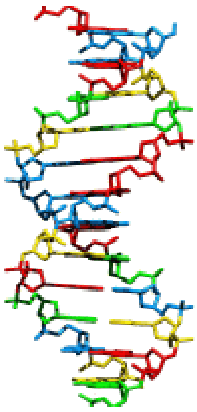
命とは何か。
命の形、二重らせん構造の意味するものは何なのか。

これからの時代の中心となっていく東の文明、価値観とはいったいどのようなものなのか。

文明法則史学と出合ってからの二十年、私はこれらのことをずっと追い求めてきました。

生命の法則

人間の６０兆個ある細胞には、その中にすべて遺伝子情報ＤＮＡが含まれています。
このＤＮＡは、アデニン（Ａ）、グアニン（Ｇ）、シトシン（Ｃ）、チミン（Ｔ）という４種類の塩基によって構成されています。
そして必ずアデニンにはシトシンが、グアニンにはチミンが対応し、結合することにより、二本の鎖は強固な繋がりを保っています。



遺伝子ＤＮＡの組成モデル

大脳から伸びる神経も二重らせん構造

これと同様に、文明の二重らせん構造を構成する二本の鎖、東の文明波と西の文明波は、それぞれ対極ともいえる属性を持つことにより、お互いバランスを保ち、繋がり合っています。
これは東洋哲学の根本である陰陽思想そのものです。

天と地、男と女、動物と植物、肉体と精神、陸と海、・・・
ふたつで一組の対となっているものは、互いに真反対の属性を持つことによって、互いを活かす働きをしています。

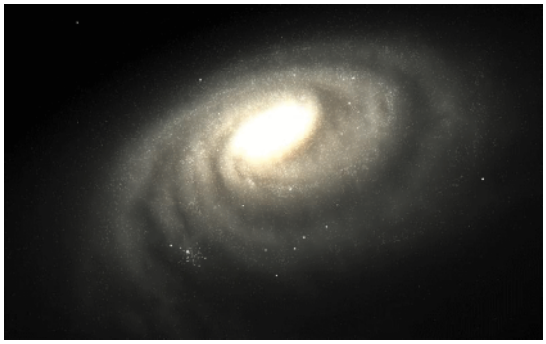
人間の生命情報であるＤＮＡ、そして歴史の生命を司る二本の文明波の持つ二重らせん構造から、生命の本質というものを知ることができます。

＜ 共生 ＞

二本の鎖は対極であり、お互いを活かし、生かし合っています。
どちらも対極となる相手がいなければ、自らの存在を維持することはできません。
超ミクロ（極小）の世界では、原子核と周りを飛び回る電子、超マクロ（極大）の世界では、太陽と周りを回る地球や他の惑星、これらも互いを活かす共生関係です。
この宇宙に存在するもので、共生関係を持たない完全に独立したものは存在しません。
陰陽で表わされるふたつのものの共生関係は、食物連鎖網、発酵食品と菌類等数ある共生関係の中の最も代表的でシンプルなモデルです。

＜ 循環 ＞

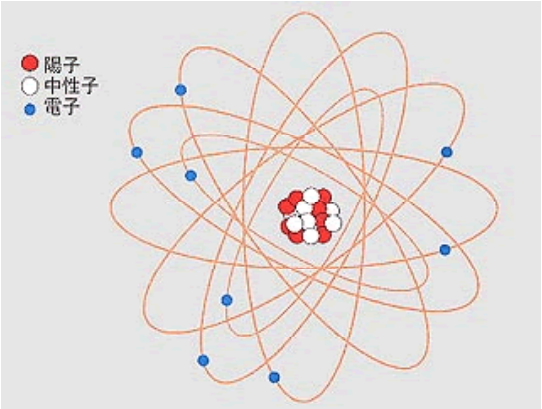
ＤＮＡがねじれた形で渦を巻き、歴史の波が８００年ごとに興亡を繰り返すように、時間の流れとともに、この宇宙にあるすべてのものは、共生関係を維持したまま循環を繰り返しています。
形あるもので永遠に同じ状態を保つものはありません。
形あるものはいつか必ず次なるものへと姿を変えていきます。
ミクロの世界では電子が高速で飛び回り、宇宙は銀河系もアンドロメダ星雲も循環し渦を巻いています。

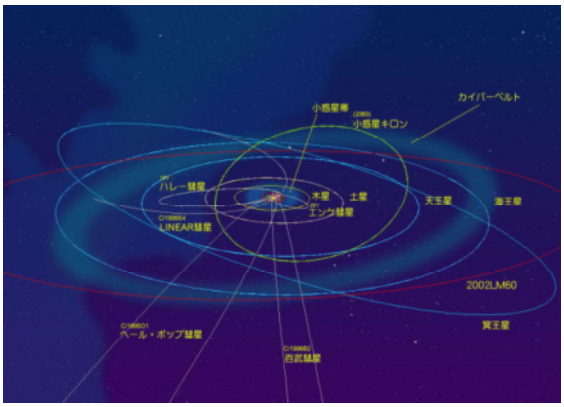


＜ フラクタル ＞

フラクタルとは、日本語で自己相似形という意味です。
ひとつのものを大きく全体で見ても、小さく部分的に見ても、そこに共通した形や性質を有するということです。
自然の中にあるものは、木、山、雲、海岸線、様々な造形が、このフラクタル性を持っています。

生命の本質を表わす二重らせん構造は、ＤＮＡというミクロの世界から歴史の流れというマクロの世界まで、スケールを越えて貫いています。
ミクロ世界の原子の構造と宇宙にある太陽系の構造も、核となる中心の周りを電子や惑星が周回するというまったくの相似形です。





ＤＮＡは空間の中に存在するのに対し、歴史の文明波は空間と時間を座標軸に持っています。
つまり生命の本質のひとつであるフラクタルは、時空の制約をも超えているということです。

見事なフラクタル性を有するロマネスク

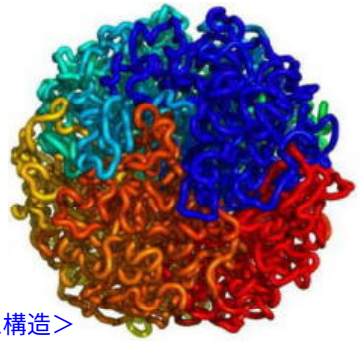
木の太い枝、細い枝、ともに同じ形を持っています。

文明法則史学を知り、生命の本質を求めるようになり、その数年後、この共生・循環・フラクタルという三つの法則が生命の本質ではないかと考えるようになりました。

その後身の周りの様々な自然現象に当てはめて考察し、当初は漠然と仮説として芽生えたこの三つの法則が、生命の根本法則であると今は確信を持って語れるようになりました。

これは私が新たに発見したものではなく、太古の時代から知恵ある人は誰しもが気付いていた真理です。

この図は古代中国から伝わる陰陽太極図です。



＜3次元のゲノム構造＞

最新の研究で、人の遺伝子情報全体の
ヒトゲノムの構造は、きわめて精緻な
三次元フラクタル構造であることが分かりました。

太極（円）の中に陰陽が生じ、お互いを飲み込まんとするように循環しています。
これは平面図ですが、この図に垂直に時間軸を加え、陰陽の循環の動きに合わせ図を回転させながら上に持ち上げていけば、まさに二重らせん構造になります。

共生と循環を最も端的に表わした陰陽太極図、これはひとつのモデルであり、このモデルが様々なスケール、状態で成り立つフラクタル（自己相似形）だということです。
陰陽太極図は、時空の構造、生命を表わす縮図です。

いつも みんな なかよし

共生･循環･フラクタル、この三つの生命法則をもっと簡単な言葉で表わすとどうなるか。
それがこのひらがな十文字言葉です。

いつも みんな なかよし

いつも ･･･ いつでも、時間の流れのどこをとっても、循環を表わします。

みんな ･･･ マクロ、ミクロ、時間、空間、すべての世界、フラクタルの概念です。

なかよし ･･･ お互いを活かし、生かし合う、共生を意味します。

“いつも みんな なかよし”この言葉に生命の本質が込められています。

画 ： kodama
http://www.geocities.jp/mizue184

生命の真理は、深ければ深いほどシンプルです。

天命の導き

私はいつも知ったようなことを偉そうに語っているので、よく人から「子どもの頃からよくお勉強ができたでしょうね」と聞かれるのですが、それはまったくの誤解です。
勉強ができたどころか超劣等生、完全な低学力児童でした。

いかに勉強ができなかったか、それを示す事例はいくらでも挙げることができます。
小中学校の9年間、クラスで真ん中より上の成績を取ったことは一度もありません。
ひどい時は五段階評価の3が二つか三つ、その他は1と2ということがありました。
中学校二年生の時は、三者面談で先生から「酒井君はクラスで最低の成績です」と宣言され、
その場で母親があまりの情けなさに涙をこぼしました。
後日その現場を目撃したクラスの友人たちから大いにからかわれたものです。

とにかく家では宿題はおろか家庭学習というものは一切しません。
学校でも授業を聞かず、先生から怒られる回数はクラスでダントツＮｏ．１でした。

それでも何とか高校、大学と進学できたのは、積み重ねの学問である算数・数学がまったく勉強しないにも関わらずよくできていたからです。
小学校の頃から算数の計算テストはクラス最速です。
早くテストをやって、余った時間に問題用紙の裏に堂々とイタズラ書きをするのが何よりの楽しみでした。

中学校でも方程式や関数はお手の物、特に中三で習う確率・統計は完璧にできていました。
授業で教わるまでもなく、教科書を見ただけですべての問題の解答を容易に導き出すことができました。
しかもほとんど頭の中だけの計算です。

友達は絶賛してくれましたが、私としてみれば、こんなおはじき遊びの延長のようなことをわざわざ授業で勉強するということが、とても不思議に感じられました。

高校一年でも確率・統計が出てきました。
入学前、数学の参考書としては最も難しい「研究数学Ⅰ」（旺文社）を買い、その章の一番最後にあった慶應大学医学部の入試問題を解いてみました。
さすがに頭の中だけではできませんでしたが、紙の上で少し計算をすると解答が明らかになりました。

私が因縁あって宇宙（時空）、生命の実相を知ろうと志し、それを一人で探求するにあたり、この天から与えていただいた論理的思考能力、分析力というのは、何よりの強い味方でした。

神因縁というものを天理教を信仰する中で持つように至ったのは、先に書いた通りですが、その神因縁を持つということも、運命、あるいは天命として生まれ落ちた瞬間から決まっていたのではないかと思います。
そう考えた方がすべてのことがより高い整合性をもって理解できます。

私がこれからの時代の「生命の理」を探求するにあたって、そのベースとなったものをまとめてみると以下のようになります。

・ 真理を知りたいというあくなき探求心
・ そこで知り得たものを多くの人に伝えたいという情熱
・ 神因縁に導かれた多くのスピリチュアルリーダーの方たちとの出会い
・ 文明法則史学から学んだ生命の本質
・ 天から与えていただいた高い論理的思考能力と分析力

たぶんこの五つの内のひとつでも欠けていれば、現在私の頭の中で構築している「生命の理」というものは築くことができなかったでしょう。

生命の理というのは東洋哲学の根本です。
これは西洋の科学的思考の対極にあります。
東洋、生命の真理が極めてシンプルであり、深い真理ほどより簡単なものであるのに対し、西洋科学は、深めれば深めるほど、より難解な世界へと入っていきます。

西洋科学で大きな成果を得ようとするならば、ノーベル賞学者たちの研究を見れば明らかなように、膨大な知識、立派な研究施設、多大なる研究費用等が必要となってきます。
私のような非組織的で、机に向って勉強するのが大嫌いな人間にはまったく縁遠い世界です。

東洋の理、生命の本質は、本質に近づけば近づくほど、よりシンプルな形となり、子どもにでも容易に理解できるものです。
それを追い求めるのに高い学歴、知識、研究施設等は必要ありません。
基本的には、それを知りたいという志、そして自然から学ぶという姿勢さえあれば、国籍、年齢、性別、知識の有無は関係ありません。

東洋を知り、命とは何かを追い求め、理解が深まるとともに、それまで学んできた知識が様々な形で繋ぎ合わさり、頭の中はよりシンプルになってきました。
シンプルでかつ美しく、誰にでも真理の門戸を開いた宇宙（時空）、生命の実相、これを知るには、何かを学ぶのではなく、ただ心を澄ますことが求められます。

心を入れかえて幼な子のようにならなければ、天国に入ることはできないであろう。
～　新約聖書　マタイによる福音書　第十八章三節　～

歴史の大転換期

今は８００年に一度の文明の大対転換期、西の文明から東の文明へ、文明の覇権をバトンタッチする時です。
一年周期の気象に於いては5月末、１１月末、南北半球のいずれかで木々の葉が一斉に落葉し、渡り鳥や回遊魚が新天地を求めて旅立つ時に相当します。

今回の大転換期は、過去の歴史の流れから、およそ１９７５年から２０７５年の百年間に行なわれるものと考えられます。
最近二回の文明の大転換期には、このようなことが起こりました。

A.D.１２００年前後　･･･　東の文明から西の文明への移行期
　東　：　日本王朝滅亡、鎌倉幕府の成立
　　中国独立を失う、蒙古民族大移動
　　インド独立を失う、回教徒インドに移動
　　サラセン文明、アッパス王朝滅ぶ、蒙古民族の侵入
　西　：　十字軍の活躍

A.D.４００年前後　･･･　西の文明から東の文明への移行期
　東　：　古墳時代の始まり
　　南北朝時代の始まり
　　インド文学と芸術の夜明け
　西　：　グレコ･ローマン文明滅ぶ、ゲルマン民族大移動

これは過去４８００年前（B.C.２８００）の西の文明の没落期、ピラミッド王朝が崩壊し、北方蛮族の進入によりエジプトで大動乱が起こった頃までさかのぼることができます。
つまり歴史上の事柄が明らかになっていて、人類が文明らしきものを築き上げた頃まで、すべての歴史の流れにこの法則は適応できるということです。

私たち人間（その他の生物も）は、世代交代し、生を受け継ぐことにより、長い時間をかけ進化し続けてきました。
ふたつの極（陰陽）を持ち、時の流れとともに循環する二重らせん構造というシステムは、環境に適応し、変化、進化をするための、最もシンプルかつ効率的なスタイルです。

二重らせん構造を持つ文明も、東と西の文明が交互に高度な文明を築き上げながら、文明全体の質を向上させてきました。

第一回西の文明期（B.C.3600 ～ 2800）にピラミッド文明を作りました。
第二回東の文明期（B.C.2800 ～ 2000）に文字を作りました。
第三回西の文明期（B.C.2000 ～ 1200）に衣服の大発達をみました。
第四回東の文明期（B.C.1200 ～ 400）に思想や宗教が大きく発達しました。
第五回西の文明期（B.C.400 ～ A.D.400）にギリシャ･ローマのすぐれた文明を作りました。
第六回東の文明期（A.D.400 ～ 1200）に詩と芸術の発達をみました。
第七回西の文明期（1200 ～ 2000）にヨーロッパ文明が作られ、物質と工業化に大躍進をみました。

村山節著『文明の交代について』　叶匠寿庵 より

今から文明周期ちょうど二つ前、3200年前の西から東への文明転換期は、アーリア民族群が西部アジア地域からヨーロッパへ民族移動し、古い文明の民衆をおそらく皆殺しにしてしまったと考えられます。
ひとつ前、1600年前の文明転換期は、ゲルマン民族群がローマ帝国文明の民衆を征服し、混血し、混合してしまっています。

このたびの西から東への文明転換期はどうなるでしょうか。
更に進化した人類が、より平和裏に東西文明の交代をすることを願うのみです。

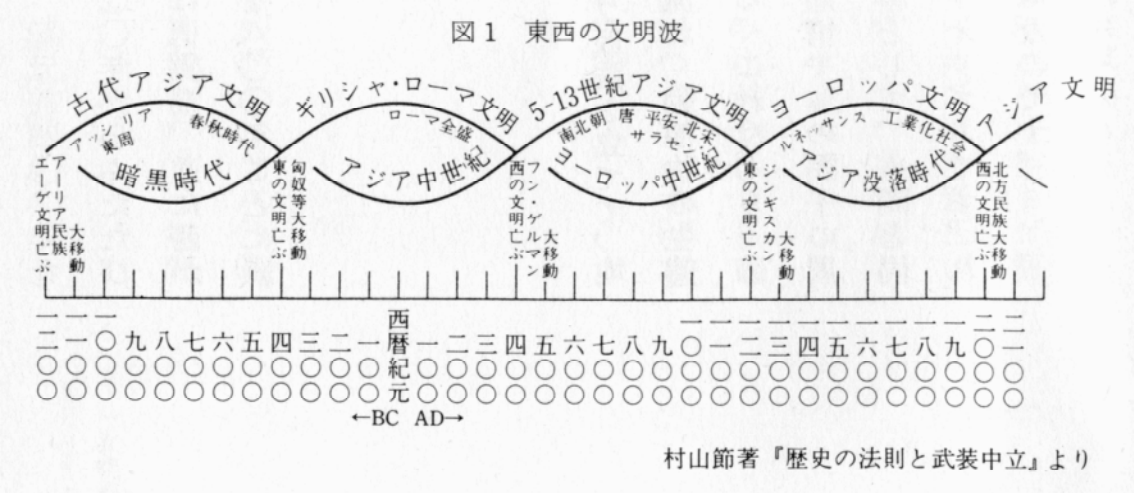
文明法則史学は、過去の膨大な歴史データから帰納法的に立証を積み重ねたものです。
村山先生の60年に渡る研究、志を持つ多くの研究員たちの検証、そこから得られたデータは、すべてこの法則性の正しさを立証するものです。

そしてその導かれた文明の法則が、生命や地球、時空の構造とまったく相似であったのです。

落ちていく枯れ葉だって美しい。肥料にもなるし･･･。
木はそのことを知っているのよ。
～　坪田愛華　～

人類の課題

再び東西文明二本の波を見てください。



二本の文明波はきれいな二重らせんを描いていますが、重なりの部分、衰退期に入る文明の波が少しだけ途切れたようになっています。
A.D.1200年から少し先の東の文明波、そしてこれからの時代に当たる2000年から先の西の文明波等が途切れてしまっているのがお分かりでしょうか。

これは作図上の理由で途切れているのではありません。
実際に衰退期に入った文明は、民族紛争や気象異変など壊滅的ともいえるような打撃を受け、いったんそれまでの文明が完全に崩壊するような形で衰退期を過ごすのです。

今回の文明の大転換期、衰退期に入っていくのは西側の文明です。
アメリカ、ヨーロッパ、この巨大なまでに成長した文明が衰退するということ、そして壊滅的な打撃を受けるということは、人類全体の存亡に関わる大きな事です。

西洋文明崩壊のシナリオ、それは核爆弾のスイッチが押されることで始まるのでしょうか、それとも気象異変、環境破壊による食糧危機、天災、あるいは資本主義経済の崩壊、･･･いずれにしても、これは一地域の問題に留まらないであろうことは容易に理解できます。
地球全体の環境破壊が極端なまでに進み、地球全体を何度も崩壊させることができるほど大量の核爆弾を保有し、軍事、食料、エネルギー、経済全体で大きくグローバル化が進んだ現在の人類社会において、西洋文明が崩壊しようとしている今は、人類全体が存亡の危機に瀕しているのです。

四季の移り変わりは正確です。
春には毎年同じ時期に桜が咲き、秋には木々が紅葉し葉を落とします。
このリズムは、年によって多少の前後はするものの、過去何百年、何千年と同じサイクルを保ち

続けてきました。

歴史の流れもこの四季の移り変わりと相似です。
東西を軸とし、１６００年サイクルで移ろいゆく文明の波は、有史以来このリズムを崩したことはありません。

今これからの時期、西洋文明が崩壊し、東洋的な価値観、文明が夜明けの時を迎えようとしています。
これは絶対に変えることができない歴史という生命の法則です。
けれどもその文明転換期に地球上で起こるであろうひとつひとつの出来事は、私たち人類一人一人の意志と行動によって、いかようにも変化させることができます。

だからこそ文明転換期の少し前に、文明法則史学というものが人類の知恵として授けられ、この人類存亡の危機である歴史の大転換期をいかに乗り切るかという生命を懸けた選択権を、私たちの手にゆだねてもらったのです。

今私たちのやらなければならないことは二つです。
ひとつは、これからの時代の主流となる東洋の理を、いかに早く世に広めていくかということ。
二つ目は、これから衰退していく西洋の文明が、自然に、そして静かに休眠期に移行していくための道筋を早急につけるということ、どちらにも時間的猶予はまったくありません。

今、医療、エネルギー、農業、・・・様々な分野で、これまでの常識を打ち破るような画期的な発明、発見、手法が生まれようとしつつあります。
これまでの一般常識からかけ離れ、商業主義にのらないものは、なかなかマスコミで報道されることはありませんが、新しく生まれようとしている東洋の時代の理は、確実に胎動を始めています。

そしてその新しい動きを上回るペースで迫ってきているのは、これまで主流だった旧時代の価値観、体制の崩壊です。
投機的な道を走った資本主義経済は完全な制度疲労をおこし、究極まで行き着いた物質文明もまた、私たちが暮らしている地球の環境を修復不可能なまでに破壊し尽くしてしまいました。
文明の終末期を迎えた西洋原理は、すべての面で現代社会に適応できなくなり、そのマイナス面を露呈すると同時に、過去の膿をすべて表にさらけ出そうとしています。
これは新旧の価値観が交代する時期に必然的に起こる禊ぎであり浄化作用のようなものです。

私たち人類の描く近未来のシナリオは、どう客観的に見ても悲観的なものが色濃く浮かんできてしまいますが、まだ可能性は残されています。
今、この瞬間からでも立ち上がれば、明るい未来は築けるものと信じています。

東と西

すべてが混沌とした現代社会において、閉塞した現状を打破しようにも、その手法を見つけ出すことは極めて困難です。
長い物質中心の文明に生きてきた私たちは、豊かさイコール物質的繁栄であり、快適性、利便性を追求することこそが人類の幸福に繋がるのだという思想が体に染みついてしまっていて、そこから一歩踏み出した思考をすることがなかなかできないのです。

これからの東洋文明の時代、どういった価値観が求められるのか、それを知ることが現状を打破し、明るい未来を創り出す鍵となります。

東洋と西洋は陰と陽の関係であり、その属性は完璧なまでに対極です。
その属性の一部を表にしてみました。

東洋	西洋
陰	陽
女	男
精神・心	肉体・物質
拡散・遠心	収縮・求心
マクロ的思考、生命学	ミクロ的思考、科学
モノとの関わりに価値をおく	モノそのものに価値をおく
すべての要素（部分）は、 共通の基盤の上にあり、 お互い深く関連し合っている	“全体”は、部分の集合体にすぎない
感性、感じる（FELL）	理論、考える（THINK）
陰陽二元論	善悪二元論

これからは右側の西洋的（陽）価値観から左側の東洋的（陰）価値観へと、時代の流れとともに移行していきますが、すべてが取って代わるわけではありません。
あくまでも主流となるものが変っていくということです。

これからは物質中心の文明が崩壊し、モノに依存しない心の豊かさを求める時代になります。
これまでの積み重ねてきた理論の延長ではなく、女性的感性の元、言葉ではなく体で感じ取っていくまったく新しい価値観が生まれてきます。

肉体を持つ私たちには、生きていくために物質（モノ）は絶対に必要不可欠です。
これまではそのモノが身の回りにたくさんあることが豊かさであり善でした。

これからはモノそのものではなく、そのモノ自体とどのように関わっていくのかという“関わり”により価値観の重点が置かれるようになります。
モノやお金に絶対の価値を置き、まるで賭博場の様な様相を呈した投機的資本主義経済は、幕を閉じなければなりません。

モノを細かく分けて分析し、その細かな部分から全体を知るという科学的思考は、決して悪いものではありませんが、これからの時代の主流にはなりえません。
科学の対極として、大きく全体を捉え、その中から個々の役割、それらの繋がりを見て取るというマクロ的、全体的思考、すべてに命の繋がりを感じ取る生命思考が、これから最も大切な価値観、思考方法となってきます。

これまでの時代、ひとつの極である科学というものが、すべての分野であまりにも重要視、あるいは絶対視され過ぎてきました。
今はその歪みがあらゆる分野で大きく現れています。

日本における私たちの暮らしは、数十年前と比べ、はるかに豊かに、便利に、そして快適になってきました。
それで私たちは幸せになれたのか･･･。
モノ、お金、生活の局面ひとつひとつが便利で快適になれば幸せになれるという、ミクロ的、科学的思考では、私たちの心を本当の意味で満たすことができなかったということです。

物質的繁栄を享受した私たちは、その代償として地球環境を壊滅的に破壊してしまいました。
これはモノの豊かさと環境という二つのものを完全に分離して考え、人間の持つ欲望のままに突っ走った科学的思考、文明の必然的に帰結する終着点です。

科学的思考と全体的、生命的思考、この二つのバランスが大切です。
これまでのように科学万能、科学＝論理的、非科学＝非論理的という誤った認識は捨て去るべきです。
科学とは、ミクロ的に真理を追究するひとつの手法であり、その対極として、マクロ的に全体から物事を見、真理を求める手法もまた重要であるということを知るべきなのです。

学校教育、あるいは大学での学問追究の場において、そこで学び伝えられているもののほとんどすべては、ミクロ的視座に立った科学的思考から生まれたものです。
今巨大な価値観の転換期を迎え、その中央点を間近に控え、今の状態は、新しい時代に向けての準備が着実に進んでいるとはまったく言えない状態です。

文明法則史学というマクロ的に歴史を俯瞰し、その生命法則を解き明かした学問は、ノーベル賞数個分以上に匹敵する人類にとって偉大な発見です。
けれども残念ながら、この文明法則史学を学問として学べる大学はありません。

私は地元広島で歯の噛み合わせ治療を受けています。
歯の一本一本は、体全体の各所と密接な関係があり、その微妙な噛み合わせの状態を調整することで、全身の不定愁訴、様々な病気に大きな影響を与えます。
これは歯科治療という西洋医学に、全身のバランスを整えるという東洋の概念が合致した素晴らしいハイブリッド医療なのですが、これも残念ながらどこの大学でも正規のカリキュラムとして指導しているところはありません。

大学という学究の場は、本来は真理を追究する場であるはずなのですが、そこに籍を置く学者の人たちはすべて科学的思考というものを前提とした教育を受け、また研究を重ねてきた人たちなので、そのレールから外れたものに対しては、たとえそこに何らかの真理が隠されていると感じても、本能的、あるいは意識的に目を閉ざしてしまうのだと思われます。

今は大きなパラダイムシフト（価値観の転換）の時、たぶん何かひとつのことで新たな価値観が公に認められれば、そこを突破口に新たなものが一斉に評価される時が来るかもしれません。
けれども今の変革のスピードは、あまりにも遅すぎるように感じます。

社会を変えていく大きな一歩として、学校教育のあり方というものを考えなければなりません。
今の国語・算数・理科・社会という科学的思考に偏ったカリキュラムから、全体を繋ぐ、あるいはすべての命を考えるというマクロ的、東洋的なものの考え方を学ぶ新たな教科を加えていく必要があります。

義務教育年齢の子どものうちから、すべてのものは命を持ち、動物も植物も、私たち一人一人はすべてのものと深い繋がりを持って生きているんだということを学ぶことができたなら、それからの人生は、ものの見方がまったく変ってくるはずです。

これからは政治、経済、文化、社会システムのすべてに変革を求められるようになってきます。
そのひとつひとつの分野について、理想のあり方というものをここで論ずることはできませんが、これからは、これからの時代の価値観の主流となる東洋、命というものを学んだ各分野の専門家が、志を持って新たな社会システムを創っていくことを望みます。

原初の理

今は８００年に一度の文明の大きな転換期で、これから東洋の時代になることは史実からも明らかです。
けれども実際はもっと大きな、何千年、何万年に一度の巨大転換期であるかもしれません。
これは誰しもが体で感じていることではないでしょうか。

確実に検証できている訳ではありませんが、１６００年周期の文明サイクル四つが合わさった６４００年サイクル、これがひとつの大きな波であるという見方があります。
東洋思想の基本は陰陽と五行説、この五行は木火土金水（もっかどごんすい）、五つの物質で構成されています。
この五行が６４００年ごとに順番に時代の理を反映し、１２８００年前に土の時代が始まり、６４００年前に金属の時代がスタートし、今この時代の転換期は、水の時代の幕開けだという説です。

たしかに、これまでは金属のように何事もきちんと形を決め、国、組織、規則、戒律というもので物事を運営し、私たち自身を律してきましたが、これからは水のようにしなやかに、自由に、そして形に囚われずにというのは、理に適っているように感じます。

西洋占星術では、２５８００年周期で一回りする黄道周期を１２星座の支配下に分け、これまで二千年以上魚座（双魚宮）の支配下であった地球は、今少しずつ水瓶座（宝瓶宮）の元に移行しつつあると考えられています。
これまでの魚座の時代は、競争、対立、派閥を象徴とする物質文明の時代、これからの水瓶座の時代は、やはりキーワードは水であり、物質と精神、宗教と科学等あらゆるものが統合する時代だと言われています。

硬い金属から形を持たない水、物質から精神、・・・すべての変化は陽性から陰性への移行を示し、今は東西１６００年周期の文明波だけではなく、その他もっと大きなスパンの波も一斉に転換期を迎え、それらすべてが歩調を合わせるように陽から陰へ向って歩みを進めているようです。

私たち人類が生まれて約２０万年、長い歴史において、ほんの数千年前に文明というものが芽生え、ここ数百年で急激にその文明を発達させ、ついには自らの手で人類の命脈を絶つことすらできるほど力をつけ、地球環境にも大きな影響を与えるようになってきました。

やはり今は有史以来人類がかって経験をしたことがないほどの巨大な文明転換期なのでしょう。
そして文明の転換期であると同時に、人類存亡を懸けたターニングポイントです。

この巨大な転換期、まったくすべてがリセットされて生まれ変わろうとしているこの時期に、新たに勃興してくる文明は東洋であり陰です。
このことはとても大きな意味を持っています。

東洋の陰陽説は、陰陽であり、陽陰ではありません。
これは陰陽が順序の理を踏まえたものであり、陰（女）が先で、その後に陽（男）が来るということを示しています。

このことは科学の分野でも立証されています。
分子生物学、発生学において、生物の基本は女であり、男はその派生系であるというのは常識です。
男性性器ペニスは、女性性器クリトリスが変形したものだと考えられています。
受精卵は最初女性になるべく分化（細胞がそれぞれの役割を持つこと）し、女性はそのまま分化を続け、男性は途中で男性化遺伝子である SRY 遺伝子の働きによって男性へと分化していくのです。

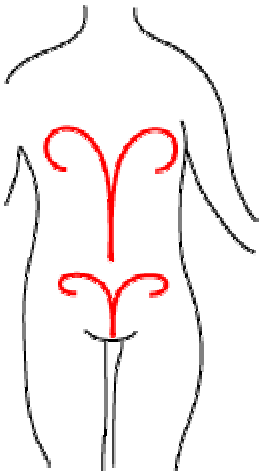
理に長けた男性は、形あるものを発展させていく能力に優れています。
感性に優れ、子を宿す性である女性は、無から有を創造する力を持っています。

これまでの価値観、体制が大きく崩れ、まったく新たな世界が生まれようとしている今この時は、無から有を生み、原初の理を持った陰の力が必要です。
そしてそれが形作られた後は、それを更に発展させていく陽の役割が重要となってきます。
そしてこのサイクルを繰り返すことにより、陰と陽の二重らせんが渦を巻きながら上昇し、歴史を含めた生命は進化を続けてきたのです。

ではなぜ陰が原初の理なのか。
理由はきわめて簡単です。
それは私たちのいるこの宇宙そのものが今現在、陰の状態だからです。

宇宙は今から１３７億年前、ビッグバンという大爆発によって生まれ、遠い星々は今も赤方偏位を示し、現在も膨張し続けていることを裏付けています。
爆発、膨張、外に向って拡張していくのは陰の性質です。
陰で始まり、今も陰性であり続けている宇宙空間においては、陰が原初の理であることは必然的事実です。

ビッグバン、膨張、原初の理を持ち、陰なる女性の身体には、その特徴がよく現れています。
女性の生殖器は、膨張の理を受け、膣、子宮、卵管、卵巣に至る道筋が、地から天に向かって噴水のように噴き上げる形を描いています。
女性性の象徴である豊かな胸も、同様のエネルギーを受けています。



巨大（陰性）な細胞である卵子は、精子と結びつき受精卵となり、新たなる生命誕生に向けて、ビッグバンのように大きく成長を続けていきます。

この宇宙空間を満たすものは、陰陽が共生し、循環し、生命の基本構造である二重らせん構造を持ったり、銀河系のように渦を巻いたりしています。
このことは宇宙空間自体も陰陽共生した理があり、いつしか膨張しきった状態から収縮に転ずる時が来るということを示しています。

陰極まれば陽となり、陽極まれば陰となる。
伸びきったバネは、縮もうとする強い力が働きます。
ボールを床に思いっきりぶつけると、その勢いのまま上に跳ね返ってきます。

いつの日か膨張しきって収縮に転ずる時の宇宙は、価値観どころではない、たぶん時間を含めたすべての物理現象が逆転し、陰陽の理も、その瞬間から陽陰の理となるでしょう。

相対

東洋の陰陽思想は、比較の中で物事を判断する相対の世界です。

左の陰陽太極図は、左側の白い上昇する太陰の中に小さく黒い小陽を含んでいます。
右側の下降する太陽の中には、小さく白い小陰が含まれています。

水墨画は、真っ白ではない画仙紙の上に真っ黒ではない墨を使い、濃淡をつけ、その微妙な変化の度合いを味わいとして楽しみます。

陰と陽は絶対的なものではなく、あくまでも比較の上に存在し、何かと比べるとこちらは陰性、あちらは陽性という考え方で、陰の中にも陽、陽の中にも陰、互いの中に対極のものを見いだします。

易経を深く学んだ心理学者ユングが、男性の中にある女性像としてのアニマ、女性の中にある男性像としてのアニムスというものの存在を唱えたのは、東洋思想から生まれた当然の帰結と言えるでしょう。

男女という性は明確に区分できるものではありません。
最近は心と体の性が不一致である性同一障害というものが公に認められるようになり、また性分化疾患（半陰陽）という男女の判別が明確にできない人たちの存在も、社会問題のひとつとして大きく報道されるようになってきました。

性とは明確に二極分化できるものではなく、連続したものの中に存在します。
この性の相対性が明らかになってきた背景には、時代が西洋から東洋、陽から陰、絶対から相対へと移行していく大きなエネルギーの存在があります。

絶対

東洋の相対に対して、西洋は絶対というものを重んじます。
絶対、これはキリスト教、ユダヤ教、イスラム教等の一神教の概念に通じます。
また一神教（宗教）と対極の関係にある科学万能主義も、絶対という価値観においては共通しています。

私たち人類は、この地球上において巨大な力を有するようになり、人類の文明の発達は、私たちを生かしてくれている周りの自然環境を抜きにしては考えられなくなりました。
インターネットから発信された情報は、一瞬にして世界中を駆け巡り、電波メディアも刻々と移りゆく世界中の状況をリアルタイムに伝えています。
経済、食料、エネルギー、私たちが生きていくために必要なほとんどすべての資源や情報は、国境を越え、世界の国同士が深く依存し合っています。

人類がまだ未発達の時期、そしてある価値観の元に急速に伸びようとしている時には、絶対という強力な求心力（陽性）を持った概念は大きな力を発揮し、ひとつの方向に向って猛烈な勢いで進んでいくことができました。
けれども今のように巨大化、ボーダレス化し、翳りの見えはじめた文明の元に暮らす人類は、人と自然、自国と周りの国々等、自分たちと周りとの関わりを抜きにしては、その存在意義を問うことすらできないようになってきています。

ひとつのものを重んずる絶対は、ひとつの極に偏る危険性を秘めています。
科学文明の発達の代償として環境を破壊し、物質的豊かさを享受する代わりに心が荒み、自らの価値観を守るが故に多くの人々が血を流し、大きな時代が終わろうとしている今この時、物事を絶対視することによって生じた弊害が大きく露呈してきています。

相対がよくて絶対が悪いというのではありません。
ひとつの時代が終焉を迎える時、それまで主流だった価値観はマイナス面を表に現し、それをクリアーしなければ、新たな時代に入ることができないのです。

今は西から東、絶対から相対へという時代の波を受け、強い求心力を持った絶対という価値観から、周りとの共生関係、バランス感覚というものを重んじる相対的価値観へと確実に移ろいつつあります。

裏の論理

西洋思想の根幹であり一神教のキリスト教も、これから時代の大きな流れの中で、少しずつその勢いに翳りを見せてくるであろうことは必定です。
キリスト教の中で説く絶対というものが、絶対ではないということが少しずつ明らかになってくるでしょう。

キリスト教では、神が土くれに息を吹きかけ男性であるアダムを造り、そのアダムの肋骨から女性であるイブを造ったと説いています。
この男性、女性という順番は、東洋の陰陽とは逆であり、生物の発生原理を解明した自然科学の観点から見て明らかに誤りです。

女性と男性、どちらも陰と陽の理合いがあり、二つ一組で成り立つ、どちらも大切な役割を持った存在ですが、西洋思想の根幹であり一神教で男性優位のキリスト教は、「絶対」という概念を強く持つが故、自らの説く「陽の理合い」を絶対であり原初であると説く必要がありました。
ただこの宇宙は陰性優位であり、原初の理は陰にあるため、キリスト教の根本に誤りが生じてしまったのです。

これは誤りというよりは「方便」と解釈した方が適切かと思われます。
そうしなければ、強い求心力（陽性）を以て、西洋文明の中で多くの人の心を引き付けることができなかったからです。

子を宿す女性は命の象徴であり、理に勝る男性は論理の象徴です。
男性（陽）を女性（陰）の上位概念として扱わざるえないキリスト教では、命というものを人間とは別の存在（神）が論理（ロゴス）で以て造り出すと説く必要がありました。

「初めに言葉ありき、言葉は神と共にありき、言葉は神であった」
～　新約聖書　ヨハネによる福音書　第一章一節　～
キリスト教は、命よりも論理（ロゴス）、言葉、愛というものを上位に置きます。
これは何よりも命を大切と考え、己の中に仏性を見いだし、己の内なる小宇宙は、外なる大宇宙と同じであると考える東洋とは対極的です。

陰と陽、東洋と西洋、論理を重んじ己の外に神を求めるキリスト教と、命を大切にし己の内に宇宙のすべてを見いだす東洋思想、どちらがいいか悪いか、どちらに価値があるかという問題ではありません。
どちらも無くてはならない不可欠な存在であり、片方だけでは人類の文明は成り立ちません。

ただ原初の理を持たない西洋思想のキリスト教は、絶対という概念を説かねばならなかったため、原初の理の真逆を根本とした「裏の論理」とならざるえなかったということです。

東洋では輪廻の思想があり、人間は死んでもまたいつか生まれ変わり、生と死は何度も繰り返すものだと考えられています。
これに対して対極の存在であるキリスト教は、輪廻というものを認めず、人間の生は一度きりのものだと説いています。

この宇宙にある森羅万象は、すべてが共生し合い、循環しています。
形あるものはいつか壊れ、人間も死して土となり、その土から植物が育ち、それを動物が食べ、少しずつ形を変えながら命というものを継承し、そのサイクルを繰り返しています。

人間の日々のサイクルもまた循環です。
夜は眠り夢の世界へ行き、昼は覚醒し現実世界を見つめ、そして夢で見た出来事は起きた直後は覚えているものの、少し時間が経つときれいに忘れてしまいます。
この一日周期の睡眠と覚醒のサイクルは、数百年周期といわれている輪廻のサイクルときわめて近似したフラクタル（自己相似形）です。

死してあの世に行き、またこの世で生を受けて生まれ変わる。
まだ幼い言葉をやっと喋れるようになった幼児は、かなりの確率で魂の世界を記憶しているという統計がありますが、大人で前世を記憶している人はほとんどいません。

人間が自然の一造物であったなら、他の自然と同じく、その生と死も循環し輪廻を繰り返すと考えた方がきわめて整合性が高く納得できます。

ただしキリスト教では、神は人間のみにコトバを与え、すべての自然の支配者として別格の扱いになっているという面から考えると、人間のみが特別に輪廻のサイクルから解き放たれた特殊な存在であると考えられないこともありません。

そうだとしても、インドや中国など世界各地で数多くの前世を記憶する人たちが発見され、それが調査によって論理的に正しいことが実証されているという事実と相反してしまいます。

キリスト教が裏の論理であり、これから時代の流れとともに衰退していく運命にあるから価値が無いと言っているのではありません。
何度も同じようなことを繰り返しますが、陰というものは陽という対極のものがあってはじめて成り立ち、どちらか一方だけがいい悪いの問題ではないのです。

キリスト教は長年に渡り、陰の対極である陽としての働きを十分に果たし、多くの人の心を救い、人を幸せにしてきたのは事実です。
また今は時代の転換期といってもまだ前半です。
たぶん２０２５年頃であろうと考えられる転換期の中央点までは陽の働きの方が強く、まだまだキリスト教には多くの人々の魂を救う役割があります。

「文明の衝突」の著者サミュエル・ハンチントンは「文明の対立は宗教の対立にほかならない」と述べています。
ほとんど無宗教である私たち日本人には少し分かりにくいことですが、文明、民族の根本には、その文明を代表する宗教があります。
（山本七平によると、日本人は「日本教」の信者だそうです）

願うことはただひとつ、この超巨大な文明の大転換期、西洋的、キリスト教的文明から、いかにスムーズに東洋的、そして新しい水の時代の価値観へと移行できるかということです。

陰陽二元論の東洋は、陰と陽両方に価値を置き、「衰退の美学」というものを持っています。
それに対して善悪二元論の西洋は、善か悪か、正しいか間違っているか、自分たちの現在持っている価値観を絶対と捉えているだけに、その力が衰えた時の姿は惨たらしいものになる可能性があります。

この文明の移行期を、いかにスムーズに、いかに血を流さずに通り抜けることができるのか、これは私たち全人類に与えられた最大の課題だと考えられます。

衰退していく文明は、これまでの暗部が表面化してきます。
そしてそれを取り繕うための施策をいくら打っても、いい結果は生まれてきません。

２００１年の９・１１テロは、アメリカが侵略戦争を始めるキッカケが欲しいがために起こした自作自演のテロであることは、知る人ぞ知る事実です。
政府が発表した公式報告書には数多くの矛盾点があり、その疑惑を決定付ける様々な情報がインターネットや、日本やアメリカで発行された何十冊という本に記されています。

アメリカが強い力を持ち、アメリカ資本主義が最高の力を発揮していた頃には、このような暗部が表面化してくることはなかったでしょう。
６０年代の半ば以降、ベトナム戦争勃発以来、アメリカの国力は文明転換期の波に乗り、弱体化の一途をたどっています。
強きよきアメリカ、世界の警察であるアメリカという姿は、もはや幻想となってしまったということに、私たち、そしてアメリカ国民自身が気付くべきです。

アメリカの暗部を明らかにしたいと考えるのは、アメリカを非難するためではありません。
アメリカそして西洋文明の唱える「絶対」というものがそうではないのだということを、一日も早く、一人でも多くの人が知ることが、西洋文明の衰退という退路をきれいに築く上でとても重要だと考えるからです。

衰退していくアメリカ、ヨーロッパ文明のきれいな引き際を作るという課題は、新しい東洋文明の中心となる私たちにも課せられています。

新たなる宗教の時代

宗教という言葉は手垢にまみれ、宗教的、宗教臭い、・・・その言葉からイメージするものは、決していいものではありません。
これは大きな時代の終末期を迎え、これまでの時代を支えてきた価値観や体制が崩壊するのと同じように、現在宗教というものを支えている体制が、これからの時代の流れに適合しなくなってきているためです。

宗教という言葉からは、宗教団体、組織、そこで説かれいる教義、教典といったものが思い浮かびますが、これは宗教という言葉の本義ではありません。
宗教の宗とは、宀（うかんむり）に示すと書き、宀は宇宙のこと。
つまり宗教とは、宇宙の示した教えという意味です。

ですから宗教は、道徳的な思想や哲学全般、もっと広義には、物理法則であったとしても宗教の一部と考えられないことはありません。

東と西の文明を交代させながら螺旋状に渦を巻くように進化してきた私たち人類は、これまでの精神的に幼かった段階では、何らかの方向に導かれるために、強い拘束力、絶対性を持った組織、教義というものが必要でした。
それがこれまでの地球文明を支えてきた陽性であり金属であり魚座の特質です。

新しい精神文明である陰性、水、水瓶座の時代は、すべてのものの命を知り融合する時代であり、その流れはもうすでにスタートしています。
チャネリング、ヒーリング、潜在能力開発法、様々なスピリチュアルムーブメントはこれから確実に広がりを見せ、現在の宗教の持つ役割に取って代わることとなるでしょう。
硬い組織や教義、戒律に守られた宗教の形は崩れ、もっと自由で、何ら拘束されることのない精神文明が新しい時代の宗教となっていきます。

ただ今はまだ時期尚早です。
現在のスピリチュアルムーブメントの多くは、「○○をするとラッキーなことが起こる ・・・ 宝くじに当たる」等人間の持つ表面的な物欲を満たすための手段として扱われ、宗教のように深くその人の生き様にまで入り込んで人生を説くことはありません。

私が今熱心に実践させていただいているトイレ掃除ボランティアは、誰知れぬ人の汚した糞尿を、素手でただ黙々と磨かせてもらう下座行で、この利を求めない無私の行為こそ、魂の救済という本来の意味で、これからの時代の宗教に最も近いもののひとつではないかと思います。

いろんなものを溶かし込み、完全に一体化していく水は融合の理を持っています。

これまで思考の中心であったミクロ的分析をする科学にマクロ的視点を持った生命観というものが加わり、これから私たちの思考は、その幅を格段に広げていきます。
宗教はより自由な形となり、日常生活により密着したものとなってきます。

そしてこれがより理想的な形で進んでいったなら、宗教も思想も、そして科学や生命観を持った論理的な思考もすべてが一体化し、それらは区別できないものとなるでしょう。

日常考えていること、行動そのものが思想であり宗教であり、宗教という言葉そのものが不要となる、これが新しい時代の宗教の本質です。

私たちは子どもの頃は学校に通い、定められた規則の中、教師という大きな権威を持った指導者に導かれてきましたが、大人になり社会に巣立った後は、自由な環境の中で、自らの意志で学び、成長していきます。
これは人類の精神文明の歩みと同じです。

もうこれからは絶対的と思える何かを「信じる」必要はありません。
ただ身近なものの中から真理を感じ、それを生活の中で、自らの判断によって活かしていけばいいのです。

スピリチュアルなものに興味を持っている人の間では、今アセンションということが盛んに言われています。
アセンションとは次元上昇のこと、三次元存在である私たちが、この大変革期にあたり、更に上の次元の存在になったり、肉体そのものが必要なくなったりするということのようです。

これが正しいことなのかどうかは分かりませんが、今回の文明の大転換期は、人類の持つ精神文明を大きく進化させるものであることは間違いないようです。

生物の進化は、必ずしもなだらかに進むわけではありません。
長い停滞の時を経て、階段状に突然大きな進化を遂げるものです。
私たちは今その段階に来ているのではないでしょうか。

上善水の如し
生きとし生けるものは、たおやかである。
硬いものは砕けやすく、力強いものは転げ落ちる。
～　老子　～

自然

すべてのものを溶かし込み、融合していく水の時代、固有名詞を持った神名を拝し、自分たちの宗教のみを絶対と信じ、幾多の殺し合いを続けてきた人類の歴史には終止符を打たなければなりません。
これからはすべての宗教がその垣根を取り払い、人類全体がひとつの共通した価値観を持つような方向に進んでいくでしょう。

冒頭でご紹介した超能力神主の菅原先生とそのお弟子さん、そして私の三人で、奈良県の南にある霊験あらたかな神社にお参りに行ったことがあります。
その途中ある神社に立ち寄って、祝詞を上げる声の聞こえる社を眺めていました。
すると菅原先生が、
「あ～あ～、今祝詞を上げても神様そこにいないのにな～」
とつぶやかれました。

驚いた私がその理由を尋ねると、
「だって今、神様が外に向って歩いて行っちゃったよ」
と何食わぬ顔で答えられました。

菅原先生とそのお弟子さんには、神様の姿が視覚的に見えるようです。
そしてそのお姿は、白装束に身をくるんだ古事記の世界の神々のようなものらしいのです。

本当にそんなことがあるのでしょうか。
失礼ながら、その時私はとっさにこんな質問をしてしまました。
「本当にそんな神様がいるんですか？
　もしかして、私たち人間の想念が勝手に創り出しているだけじゃないんですか？」
今考えても本当に失礼な質問だったと思うのですが、それに対して菅原先生は、まったく動じることなく、ただじっと前を見つめたまま、
「う～ん、そうかもしんないね」
と軽く答えてくださいました。

なんというナイスなお答えなんでしょうか。
それ以来、私は菅原先生のことがますます好きになりました。

世界中あまたある宗教で、様々な奇跡や霊的現象が起こっています。
宗教というものは、そもそも開祖の超常的霊能力によって生まれたものがほとんどで、その霊能力の高さが、宗教の持つ求心力のひとつとなっています。

私たち人間は、超常的なことを目の当たりにすると、ついそれがあたかも絶対的なものであるかのように感じてしまいます。
けれどもその超常的現象から生まれた世界中の宗教で説かれている「神の言葉」は、当然ながらすべてが一致している訳ではなく、多くの矛盾点を抱え、その矛盾した対立点が宗教間の争いの元となっています。

例え人智を越えた「神の言葉」であったとしても、それを絶対的、普遍的なものと信じ込んでしまうのはとても危険なことです。
その言葉や現象に心惹かれるものがあったとしても、常に自分というものをしっかりと持ち、自らの判断力でそれらと対応していかなければ、カルト的（狂信的）信仰になってしまう可能性があります。

全人類が共通して持てる価値観としての宗教は、私たちみんなが共有できる「自然」というものをベースとして持つべきです。
ここをはずし、自らが信じる固有名詞を持つ神のみを信じるということは、他との融和を拒否した排他的姿勢に他なりません。

これまでの宗教も自然というものを無視して存在していた訳ではありません。
宗教と自然はこれまでも、そしてこれからも深い関わりを持ち続けています。
ただこれまでの宗教は、人類の精神が発達途上であったため、自然の持つある一面だけを捉え、それがあたかも普遍性を持った真理の全体像であるかのように説く必要がありました。

砂漠で生まれたキリスト教は、その厳しい自然環境の中、理想の世界というものを地上とは別の天上界に求めました。
また牧畜を生活の糧としている民族で生まれたため、肉食は禁忌とはなっていません。
肥沃な大地で生まれた仏教は、恵まれた環境の元で、自らの中に仏性を見いだしました。
農耕民族の宗教として生まれた仏教は、家畜は農耕をするための大切な道具であり、その動物を食べることは基本的に戒律で禁じられています。

稲作、牧畜をする民は、植物、動物といった自然を支配するという考えを持ち、その人間もまた絶対的な支配者としての一神教の神を創り、その神から理性を持った人間が自然を支配する権利を与えられたと考えます。
稲作をする民は、水、雨、水を蓄えておくための森、周りのすべての自然に対して畏敬の念を持ち、そのひとつひとつが信仰の対象となり、そこから多神教が生まれました。

これまでの時代、砂漠で生まれた宗教は、
「灼熱の太陽、乾燥した空気、荒野、・・・これこそが自然であり、神が創りたもうたものである」
と説き、肥沃な大地で生まれた宗教は、
「豊かな自然の恵み、柔らかな日差しと風、・・・この自然こそが神の姿である」

このように人々に語り伝えてきました。

信じる宗教を持つ多くの人たちは、自らが信仰する宗教こそが最高の真理であり、普遍的なものであると信じています。
けれどもその宗教は、それが生まれ発展してきた土地や時代の気候風土が色濃く反映した、ある意味ローカルなものであるという事実を、もっと深く知る必要があります。

今人類は、大きく精神文明を成長させる時を迎え、水という融合の時代に入り、世界中すべての人々が共有できる自然本来の姿から、思想、宗教を生み出すべき時が来たのだと思います。

自然が見せる表情は実に多様で複雑です。
それを人間の頭で理解していくのはきわめて困難です。
けれども感じることはできます。

だからこそこれからの時代の宗教は、学び、考えるのではなく、気付き、感じ取っていくものとなるのです。

Don't think.　Feel.

考えるんじゃない。
感じるんだ。

「燃えよドラゴン」より

究極の愛

文明法則史学と出合い、すべてのものに命が宿っているという真理を知ってから、これまでの私の歩みはまさに感動の連続でした。
東洋の真理は、知れば知るほどシンプルで美しく、かつ寛容で奥深いものです。

私は９５年に母を亡くしました。
愛情深かった母は、二週間あまり植物人間の状態となり死に至るその前後に、様々な不思議な現象を通して、私に愛を伝えてくれました。
「愛はパワーではなく状態である」
「この世の中で最も光り輝く存在は、自分の胸の内にあり、それは誰しもが持っている」
この母から伝えてもらった愛の姿は、見事に東洋的真理と一致します。

この時空（宇宙）すべてを貫いている共生・循環・フラクタルという生命の法則は、私のような無頼の徒にも、心優しく真理の門戸を開いてくれました。
よくこんなシンプルな基本構造の上に、ここまで多様性を持った時空というものを形作れたものだ・・・、このことで何度感動に胸が震えたか分かりません。

このシンプルな基本法則を感じ取るのに、まったく条件はいりません。
時代、国籍、知識、年齢、そういったものは一切関係がありません。
この時空の仕組みは、フィリピンのゴミ山で暮らす子どもたちにも、厳寒の北極圏で暮らすイヌイットの人たちにでも、誰にでも、誰から教えられることなく感じ取ることのできるものです。

シンプルで誰にでも理解できる時空の本質、これこそが究極の愛ではないでしょうか。
すべてのものを許し、受け入れる。
時空の構造は、愛の本質そのものです。

時空とは生命体であり、愛そのもの、つまり命と愛とは、分けて考えることのできないものです。

先に思想、宗教、そして科学、生命的思考、すべてが一体化してくると述べましたが、同様に、命、愛、時空、二重らせんという構造、そして神、仏、これらもすべて究極的には同一のものであるのだと感じています。

命は東洋の理、愛は西洋の理、互いに対極でありながら、より深い、あるいは最も深い部分では、まったく同じものなのです。

愛の伝達

インターネットの発達により、世界中に一瞬にして情報が行き渡るようになり、情報というものを政府、資本家、大手マスコミが自由に操作することができなくなりました。
世界中の情報を、家にいながら自由に閲覧できるインターネットというメディアは、“広くあまねく”という水の理を反映した新しい時代の素晴らしい贈り物です。

ただ何事も価値というものには両刃の剣のような面があり、あまりにもたくさんの情報があふれた中で日常を過ごしていると、自分にとって何が大切な情報なのかということが分からなくなってしまいます。
また自然から隔絶した加工済みの二次情報ばかりを目にしていると、感性が鈍り、物事の本質を見極める力が損なわれていきます。

物質文明が究極の行き着くところまで行き、今のままでは人類の未来はないと多くの人が感じています。
けれども、では具体的にどのように行動していけばいいのか。
そう問われて、明確な答えを述べることのできる人はほとんどいないでしょう。

物質的に恵まれた生活を享受し、頭の中、精神、人間関係、身の周り、すべてにおいて捨てきれない多くのものを抱えた私たちは、一見自由なようですが、その選択の幅はごく限られています。

今は価値観の大転換期、その前半期です。
まずはこれまでの古い価値観を脱ぎ捨てて、新しい、より素晴らしい価値観を享受する時です。
新しいものを手に入れるには、先に古いものを捨てなければなりません。
手のひらを開き、いったん握っているものを離さなければ、新しいものを手に入れることはできません。

新しいものを手に入れるにはパワーがいりますが、古いものを手放すのは、新しいものを手に入れる何倍もの勇気とパワーが必要です。
けれども今はそれをしなければならない時です。

村山節先生は晩年、
「東大、京大、すべての大学の先生方、この文明法則史学に誤りがあると思うなら、
　どうか堂々と私に反論してください。いつでも私はそれを受けて立ちましょう」
と述べられていました。

それに対して、もちろんどこからも反論はありませんでした。
当然でしょう、文明法則史学の理論は完璧に立証されていて、反論の余地はないのですから。

ならば学会はそれを認めて大騒ぎになったかというとそうではありません。
ただ自分たちにとって都合の悪い真実には、沈黙を守るのみです。

見ざる、言わざる、聞かざる

情報がたくさんあふれていることの欠点は、何が本当に大切なのかということを見極めづらいこと、そして本当に大切なことから意識的に目を逸らしても、時の流れとともに、あまり罪悪感を感じずにすむということです。

今は文明と価値観の大きな転換期であると同時に、一人一人の生き方に大きな転換を求められている時です。
それがたとえ苦難を伴う道であっても、避けて通ることはできません。

私は、己の天命として、この新しい時代の理を生涯かけて求め、伝えていくつもりです。
このレポートを読んでくださっている方たちも、どうか刮目し、勇気を持って真理への道を歩んでください。
そしてそれを周りの人たちに伝えていってください。
それが私の願いです。

愛の反対は憎しみではなく無関心です
～　マザー･テレサ　～

あとがき

これまでもホームページの中で、自分なりに考えた断片的な「時空の真理」を書いてきましたが、スピリチュアルな世界に入って３０年、神の道を志してから２８年、ようやっとひとつの流れの中で、自ら学び、感じたことを書き表すことができました。

これは超グータラ人間である私にとって、導きというものがなければ為し得なかったことです。
この春からここ半年あまりの間、私の周りは、奇跡と意味ある偶然（サイン）の連続でした。

トイレ掃除を実践し、食事を改善してから周りの状況が動き出し、あるスピリチュアルな出会いの中で、自己を深く見つめ、これまで学んできた生命の法則と、西洋の理について、頭が暴発するぐらい深く考えさせられるという経験を持ちました。
ある奇跡としか言いようのない導きから、己の最も深い心の闇を見せられ、それをクリアーにする方法の手引きもしていただきました。
私の持っている生命思想を、最も深いところで共有できる友に、あるとてつもなく大きなトラブルが襲い、それが私にも深い意味のあることだという大きなサインをもらいました。

それらすべてのことが、このレポートを書くための導きであったことが、今はよく理解できます。

レポートにも書いている通り、私は子どもの頃まったく勉強をしないいたずらっ子でした。
今も非努力家のグータラ人間である性格はそのままです。
けれどもそんな私にも、天は大きな恵みを与えてくださり、様々な真理に触れる機会を得ることができました。

このグータラな性格をなんとかしたい、これまで幾度となく悩んできましたが、三つ子の魂百まで、そう簡単に直るものではありません。
これも天から与えていただいた恵みなのだ、それとどうやって付き合うか、今はそう考えられるようになりました。

私の感じている『真理は深いものほどシンプルである』というのは、間違いないものだと考えています。
なぜならば、私にでも理解できたのですから・・・。

私に理解できるものは、誰にでも理解できる。
そう感じられるよう、私に怠惰な性格を天が授けてくださったのだと思います。
私が目指すもの、それは「愚民の星」・・・みたいなものです。

今は本当にものすごい時代です。
明日どんな大きな出来事が起こっても、まったく不思議ではありません。
そしてこの時代のダイナミズムは、これから更に増幅してくるであろうことは確実です。

これをいいと取るか悪いと取るか、それはその人自身の考え方ひとつです。
ただ間違いなく言えるのは、今この時ほど、何らかの行動に対して結果が早く生まれてくる時代はないということ。
そして何か志を持って事に当たろうとしたならば、今は最高のチャンスだということです。

今回の大転換期は、たぶん大きな時代の波が複数重なって形作られているのだと思われます。
そのため、これから生まれてくる新しい思想、生き方は、数百年という短周期ではなく、数千年、あるいは数万年という長いスパンで人類のスタンダードな価値観となる可能性があります。
そしてその価値観を創り出していく作業には、志さえ持てば、私たち誰でもが参加できるのです。

これはやはりどう考えても、エキサイティングで楽しいことだと思わざる得ません。
泣いても笑っても、今人類の置かれている状況は変わりません。
だったら人類史上稀有なこの時を、喜んで通るのが最もハッピーな生き方でしょう。

心の時代は、心の変化がすぐに表に現れてくる時代です。
日々どのように生きていくか、それを考え葛藤しながら実践していくと、それに対する反応がほとんどリアルタイムで返ってきて、これほど楽しいことはありません。

楽しみは、分かち合うと増えるもの。
自ら体験した楽しいことは、みんなに伝え分かち合うと、楽しみが楽しみを呼んで増えてきます。
みんなの輪の中で、その楽しみが増幅し、その思いが地球の明日を変えていきます。

いつも みんな なかよし 、やっぱりこれが宇宙の基本法則です。 (^o^)v

2009/10/12

画 ： kodama
http://www.geocities.jp/mizue184
楽しいイラストがたくさんあります♪